

昭和二十七年七月二十三日第三三三號郵便物認可  
行(毎月一回・十五日発行)

(通第一六五号)

# 慈光

第十四卷

第十二号

目  
親鸞聖人の信仰……………近角常観…(1)  
水の味……………高原憲…(3)

近角先生を偲ぶ……………三瓶徳英…(9)

次  
堂の鈴(九)……………佐藤強三郎…(13)

仏典と私との親しみ(一)……………福島政雄…(18)

# 親鸞聖人の信仰

近角常観

求道学舎来集の諸兄姉妹足下!!

本日は日本宗教界の偉人、親鸞聖人入滅の聖日なり。七百年の昔、聖人の胸中に宿りたまひし仏陀は、如何に慈愛の塊たりしよ。その信仰の如何に単純にして、その生活の如何に質朴たりしよ!!

聖人の一生は信仰の生活なり。仏心の実現なり。五千余巻經典の真髓を鐘めたるは、仏陀救済の御声なり。三千年來開展せる仏教の骨目を収めたるは信仰の一点なり。

予はこの聖日に際して聖人を追懐して悲喜の涙に堪えざるものあり。予は歎々の言を列ぬるを止めて、むしろ聖人が信仰の蘊奥を披瀝したまえる『歎異鈔』の一節を拝読して、無限の法味に浴せんかな。曰く。

各々十余箇国ノサカイヲユエテ、身命ヲカエリミズシテ  
タズネキタラシメタマウ御ユメロザシ、ヒトエニ往生極  
樂ノミチヲトイキカンガタメナリ。

まことに生命をかえりみず、真面目に道を求むる人は、安心問題を解決するよりほかに目的のあるべき筈なきなりとの仰せなり。

シカルニ念仏ヨリホカニ往生ノミチヲモ存知シ、又法文等ヲモシリタルラント、ユメロニクム思召シテオワシマシテハンペランハ、オオキナルアヤマリナリ。モシシカラバ南部北嶺ニモユメシキ学生タチ多ク座セラレテソウロウナレバ、カノヒトビトニモアイタテマツリテ往生ノ要ヨクヨクキカルベキナリ。

聖人は学者を以て自ら任じたまわず、学問のことなれば、他に往きて聞くべしとなり。聖人の信仰は学問や理論にあらざるなり。

親鸞ニオキテハタダ念仏シテ弥陀ニタスケラレマイラスベシト、ヨキヒトノオムセヲコウムリテ信ズルホカニ別ノ仔細ナキナリ。念仏ハマコトニ浄土ニウマルムタネニテヤハンペラン、マタ地獄ニオツル業ニテヤハンペラン、総ジテモテ存知セザルナリ。

反覆、熟読したまうべし。「信ずる外に別の仔細なき也」とは、如何に力強い確信なるかな。かく聖人の胸中に単純に響ける信仰の音は、如何で我等が心の絲に反響せざるべき。信仰はそれ自身が目的なり、信ぜざるべからざるが故

に信するなり。地獄か、はた極楽か、その結果の如何を考うるの余地なきなり。

タトイ法然上人ニスカサレマイラセテ、念仏シテ地獄ニオチタリトモサラニ後悔スベカラズソウロウ。ソノユエハ自余ノ行ヲハゲミテ仏ニナルベカリケル身ガ、念仏ヲ申シテ地獄ニオチテソウラワバコソ、スカサレタテマツリテトイウ後悔モソウラワメ。イズレノ行モオヨビガタキ身ナレバ、トテモ地獄ハ一定スミカゾカシ。

世界広しと雖も、いまだこの如き確固不拔の信仰を聴かざるなり、動きなきこと大盤石の如し。親鸞聖人の法然上人を信じ給うことの深き、一身の運命を全然その意思に委ねられたり、永劫の生命をその生殺与奪にまかされたり。

嗚呼聖人の胸中一点の私なく、一毛の疑いなし。実にこれ、罪人断頭台にのぼりて、生死を獄司の手に托し、また慈母のふところに眠りて何事も知らざる嬰兒の如し。

『何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし』  
実にこれ人生の奥底を叩きたる響きなり。人生の苦痛を実感したるものにして初めてその味を感ずべし。人生はまことに危き橋をわたり險しき岸に沿うて走るが如し。瞋恚の炎は餘々として天を焦し、愛欲の海は青ずみてその底を知らず、晏然として坐せるもの正しきか、苦悶して座に堪ざるもの狂えるか。

『地獄は一定すみかぞかし』

実にこれ人生の真意義を突感したる叫びなり。ここにいたりて誰か、仏の声の聞えざるべき、誰か仏の光を仰がざるべき。嗚呼信ずるより外に別の仔細なきなり。

弥陀ノ本願マコトニオワシマサバ、釈尊ノ説教虚言ナルベカラズ。仏説マコトニオワシマサバ、善導ノ御釈虚言シタマウベカラズ。善導ノ御釈マコトナラバ、法然ノ仰セソラゴトナランヤ。法然ノ仰セマコトナラバ、親鸞ガ申スムネマタモテムナシカルベカラズソウロウカ。センズルトコト、愚身ガ信心ニオキテハカクノゴトシ、コノウエハ念仏ヲトリテ信ジタテマツラントモ、マタステントモ、面々ノ御ハカライナリト云々。

嗚呼これ聖人の内心に響ける仏の御声なり、聖人の心眼に映せる仏の御光なり。聖人が実験の披瀝なり、聖人が信仰の告白なり。

首をめぐらせば年所修々七百歳。目を閉ずれば聖人の温容、洋々乎として吾人の左右に影向したまえり。耳を澄ませば聖人の実語、歴々として吾人の内心に響き渡れり。

嗚呼聖人は吾人永久の光なる哉、吾人永劫の命なる哉!! 遙かに追懐欽慕の情を寄すことりの如し。頓首。

明治三十五年十一月廿八日夜半、灯下にてこれを認む。

# 『水』の味

高 原 憲

黒い雪

大正六年二月四日

寒い日でした。午后から降り出した雪は、夕方頃にはもう天地を白一色に塗りつぶしていました。大学の講義がすんでから、美津野泉青はいつもの通り雑誌部で仕事をしました。その日は荷物の整理もあり、かなりの労働をして、夕暮に雪をふんで宿へ帰りました。実は泉青は前年の十一月末から、かなり烈しいセキに苦しんでいながら、他に自覚症状もなかったもので、少しも氣にとめないで生活していたのです。

卒業試験はもう間近に迫っていました。ノートを取らないで、参考書一点張りで通して来た彼には、参考書を一読するだけでも相当に骨でした。夕食後、病理学総論をとり出して机に向つたのです。開巻第一章は「充血と貧血」です。ふと喉の中が生臭いのです。はて変だなと、口の中に指を入れて見ると血がついて来ます。セキが出てムセ気味になる。縁側へ出ました。唾を吐いてみる。雪が紅に染まる。こんな筈はないがと、一度二度と吐いて見ました。

一高時代には近角常観先生の御教化を蒙り、三年の間聞きぬいていた筈であつたのです。何時命終しても大丈夫と力んでいた信念も今はどこへやらです。赤い血を見ただけで、白い雪が真黒く見える彼のみじめさです。絶望の真只中に、あら不思議や、彼を呼ぶ声！正に招喚の勅命です。色にも染まず出て来る御念仏です。ああ仏はかねてしろしめしてあつたのだ。彼はしみじみ御念仏申すのでした。そしていつのまにか、安らかな眠りについていました。

泉青は聞法一路を辿りながらも、生来持ちつづけている電灯を手放そうとしません。太陽のあまねき慈光を仰ごうともせず、影のうすい電灯にのみ頼ろうとしています。一度事にぶちあたると、頼みの電灯がぶちこわれます。泉青の電灯も赤い血でうち消され、その一瞬、闇黒です。その暗を破つて照らし給う慈光に、ただあきればてるのです。

「その手にお持ちになつてゐるのは何ですか」おや、お恥しいことです。赤い血でうちこわされた筈なのに、もういつの間やら予備球をとり出して、得々と電灯をつけています。何としぶと奴でしよう。雲間からときどき射しこんで来る慈光に、彼の正体を照らし出されては、静かに御念仏申すより外ございませぬ

しまつた！咯血だ。心臓は早鐘の如く打ち出しました。風をあざむへほど白く輝いていた雪が、真黒く見え来ました。闇黒の世界にただ一人！足もとの大地はまつ二つに割れた。コンコンとこみあげて来る血を無意識にタオルでうけていました。どうして床の中に入つたのか記憶がありません。

泉青は中学時代に高山樗牛が好きでした。樗牛が肺を病んで咯血したことを書いてある日記文を読んでは、感激を覚え、詩的情調をさえ味わつたものでした。今現実に泉青自身の口から鮮血がほとほと流れているのです。

夕夕詩人、良家節は死に直面して本音を吐きました 呼吸器  
生きも死にも 天のまにまにと平らけく 葉城

思いたりしは 常の時なりき  
と。もつともです。人の事は詩的でも、わが事と来たら死めです。ただただ死にたくないのです。父母のこと、故里のことなど、一瞬の中に走馬灯の如く、頭の中に去来するのです。

## 西方淨土

中学生の頃から私は仏教に心ひかれたものである。どこか仏教講演会などがあると、よく聴聞に出かけたものである。私の祖父が田舎の真宗寺院の住職であり、極めて温厚な人で、子供心にも尊敬に値する人物であつたことが、今だに深く印象づけられている。小学生の頃には夏になるとその祖父のもとで暮らしたものであるが、その頃にうけた感化が仏教との御縁を深めたのかもしれない。

中学を出て、当時校長であつた新渡戸稻造先生をしたつて上京し、一高に入つた。入学当初に私の心をとらえたのは徳風会の掲示であつた。近角常観先生を中心とした一高生の仏教の集会であつた。毎週一回本郷の求道学舎に集つて、先生から「歎異鈔」、「唯信抄」など数々の講義を聞いたものである。毎日曜日には一般のための日曜講話にも出かけた。今から考えると当時先生から頂いた御教化によつて私の人生観なり、また私の医者としての生活態度は、どれほど影響をうけたかわからない。

当時から聞法に心ひかれながらも、人間の生死の問題はどうしたものか私にとつて身近な切実な問題とはならなかつた。人の死は結局路傍の問題でしかなかつた。しかしその後私の身辺に相次いで起つて来た三人の弟の死によつて、私はいいしれないショックをうけた。そして聞法の対度

にも方向転換が来たようである。

私が高に入つて間もなく起つたのが、小学校六年生の弟の死である。彼は勝気で成績も優秀であつた。突然猩紅熱に犯され、数日にして咽喉を犯され、水も飲めず、言語も発し難いほどにはれ上り、一週間目には危篤に陥つてしまつた。夜半突然床に坐して、マンマンシヤン（仏様）を拜みたいという。父は仏壇に灯を点じて弟をいだいた。珠数をくれというので、それを手にかけてやると、苦しい声の中から念仏申すのであつた。横になつて一時間もたつと、また拜みたいと言う。珠数をとつて念仏を称え終ると珠数を投げすて、そのまま息が切れた。かねては仏様とは御縁のなかつた彼も、たしかに仏様に召されていつた姿を、眼前にみせつけられた。

次いで起つたのが私の次の弟の死である。彼は純情で頭がずばぬけてよかつた。私が高を出ると同時に東大の独法科に入つた。彼も私と同じく徳風会と縁が結ばれて、近角先生の御教化をうけることになつた。東大に入つてからは求道学舎に入舎し、朝夕先生の勤行に侍り、またいろいろと先生から御世話を頂いたものである。東大卒業間際になつて略血し、療養のために両親の許へ帰つて来た。その多彼の病状は次第に悪化するばかりで、どうしても信仰に

めるようにして頂いた。

危機はいよいよ迫つて来た。薬を頂くにしても「こんな薬で治らうなどと考へないが、一時間でも薬になつたら皆と一語に喜べる」といつて一包の薬をおし頂くのであつた。誰かが立っているのに気づくと「泣くどころのさわぎではない。こんな嬉しい、ありがたいことがあるものか」といつてたしなめたものであつた。時々強い咳がこみあげて苦しんで来ると「こんなに苦しまなければならぬ私がこんなに喜ばして頂けるのだ、ありがたい」といつて朗々とお念仏が絶えない。踊躍歡喜、実に手の舞い足の踏むところを知らないほどの法悦を、彼の臨終に拜ませて頂いたのである。彼もまたお浄土に召されていつたのである。

一番末の弟は、長崎に落された原爆にあつて、二週間重態のまま床についた。いよいよ臨終に近づいて、彼の枕頭で私は仏の慈悲を語りお念仏を申すと、彼もはじめてお念仏を称えて、につこりとして大往生の素懷を遂げた。妻と七人の子供を残して……。

彼が往生を遂げたのは、現在（昭和卅一年落成）療養所が建つている東望山である。私はよくこの小山に登つて、太陽の没せんとする西方、海の彼方を眺めるのがすきである。西方浄土という。かなた西のはてにお浄土があるのか

入れないというのが彼の病中の悩みであつた。病状が末期になつて、彼はふと手の浮腫に氣ついた。はじめは肥つて来たのだと誤認して心から喜んでいた。

ちようどその折である。父が手塩にかけていた寒芳蘭の花が開いた。彼はこの美しい花を眺めながら、父が手にかけられてから今日まで幾年になるかと聞いた。十二年目の今日、この花が咲いたのだ。花は独りで咲いたと思つているかも知れないが、一輪の花のかけにも長い年月の父の苦労があつたのである。彼は何か心に感じたものの如く

「自分もきつと一度は花を咲かせて見せます」  
と言つて意気込んだのであるが、肥えたと思つたのが、最後の徴候なのである。立派な頭脳を持ちながらこんなになるとは堪えがたいことであるといつて、父が流すやるせな涙を通じて、彼は晴天の霹靂のごとく、仏のお慈悲を頂いたのである。彼の口からお念仏がほとばしり出た。

「近角先生のお念仏の声色になるが仕方がない」といつて、朗々とお念仏が出て来た。信仰にはいれないことを苦にしていた彼だけに、お念仏とともに彼の顔はひかり輝いた。それまでは牛乳が少しでも変であると、これ位のもので自分は犠牲にはなりたくないといつて捨て去る彼であつたが、それからの彼は百八十度の転回をやつた。一二滴の牛乳がこぼれると、ああもつたいたいといつて、な

ないのか、私は知るよしもない。だが太陽が静かに沈み行く西のかなたに心ひかれるのである。天にまします我等の神よと呼ばれている天国の空漠たるものにくらべると、西方の浄土という表現は実にあざやかなものである。太陽の沈み行く西のかなた、この地上から万人がこの同一方向にむかつて手を合せ、互に手をとりあつて、辿つて行くとする彼岸、そこにお浄土があると否とにかかわらず、お同行の目標だと私は思う。

人の一生を航海にたとえる。山から木材を切り出して、船の建造がはじまる。人間の生がここにはじまるのである。船の装備ができ上つて、進水式を終え、いよいよ船出となるのであるが、これが人間の結婚式だといえよう。新郎が船長として舵をとる。新婦は機関長としての席について処女航海へ船出するのである。この意義ある船出の時にあつて、最も重大なことは何であろうか。それはこの船の行先は何処であるか、目的の港は決定しているかといふことである。

ところが人生航路の船出にあつては、行先きの決つていない船が多いのである。自標なしの船出は航海にはならない。それは漂流でしかないのである。右の方が景気がよさそうだと舵を右へとり、左の方に人気があると舵をとりなおす。右往左往している。船路はいつも晴天とはさまらな

い。風となり、雨となり、時には大暴風雨となるであろう。難波必至である。ここに航海の目標が必要であり、又この目標を決めるには羅針盤がなくてはならない。

人生航海の目標が何処なるか、人生航海のコンパスは何であるか。この二つの問題を船出の日から二人して解いて行かねばならない。ここに人生生活の意義がある。この問題を解明してめでたく彼岸にゴールインすることが出来たら、その人こそ人生の最大の勝利者として讃えられるであろう。

船の最後の目標を私は西方浄土にしている。この久遠の目標を二人して、否、万人が目ざして一路進んで行かねばならない。久遠の一点と結ばれる直線は、皆平行にして相互に交錯することはない。久遠の彼岸へと辿り行くお同行の足跡はこうでなければならぬ。お浄土は果して存在するのか、花咲き、鳥歌うような安楽境なのか、それは私には全く知る由もない。私にはその存在が問題ではない。私が辿って行く方向が決定しているかどうか問題である。

人生航海の船出の最初から僅か一分でも方向が違っていたら大変なことになる。またとあとでもどり不能のことであるからである。この方向を正しくするために、間違いのない絶対のコンパスがなくてはならない。私のコンパスはお

を聞かば夕に死すとも可なり」でなければならぬ。あるようであてにならないのが明日である。今日一日か人生劇の一幕である。この一幕にいろんな登場人物があるであろう。病める人物は今日一日をまじめに療養しなければならぬ。看護する人物は病人のために一日をささげきつて看病してあげる。仕事に堪える強壯な人物は今日一日を仕事に打ち込む。静かに幕が下りて皆静かに眠りにつく。今日一日の一幕が、最初の幕であり最後の幕であるかも知れない。明日をあてにしないで今日一日の一幕を悔いなく踊り抜かなければこの人生劇はお芝居にならない。ただ徒らに幕を繰り返すだけでは意義がない。

ここに五重の塔を建立しようとする。まず今日一日は基礎工事に全力を打ち込む。明日をたのんでいい加減な仕事で今日一日を過すならば、他日五重の塔が出来上った途端に倒れおちるであろう。明日なきものと心得て、今日一日に精魂を傾けるならば、一日にして美事な塔の完成が約束されるであろう。浄土も存在しているのではなくて、その人に約束されるものである。

五十六才になる男が私の病院を訪れた。自分の病は不治であることはよく心得ているが、あと幾年の余命ありやと問うのである。それを知つて何になるかと反問すると、自

念仏である。雨も風もあらしもコンパスをたよりに乗り切れるように、幾歳月の喜びも悲しみも、お念仏をたよりに乗り越えて行く。

戦場で飛行機が敵弾で損傷をうけると、飛行士は脇目もふらずに一路日本の基地を目ざして飛んで行く。重みとなるものは片端から機外に捨て去り、身軽にして、基地へ基地へと飛んで行くのである。決して遊覧飛行でない人生の飛行も、同様に基地を目ざして飛んで行かねばならない。「あと戻りあともどりして辿らん甲斐なきことに心惑いて」、漂流しながら、悠々と遊覧三昧に忙しいのが人間の姿である。墮獄必定であろう。

航海が遊覧でない限り、早く彼岸に到達すべきである。彼岸から「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん」と喚んで頂いているのであるが、雑音に耳掩われて一日でも旅路の長かれとのみ願うている。

遠路はるばる私の病院を訪ねて来た病人がある。診察をすますと、どの位もてましようかと尋ねる。「あなた一代は大丈夫ですね」と答えると、彼は非常な御満足で、よるこんで帰つて行つた。一時間ばかりすると、またやつて来た。停車場まで行つたが、急に一代ということが氣になり引き返して来たのである。

人の一代は、今日一日と心得ねばならない。「朝に道

分には子供がある、いろいろと準備の都合もあるというのである。的中してよろしきかと問うと、自分の友人二人の寿命はよくあてられたので、自分も訪ねて来たのだという。あと幾年位の寿命かと私に返答を迫つて来た。私は答えた。あなたの病は不治の状態にある萎縮腎である。しかしあなたの考えは甘い。あと幾年とは何事ぞ。はつきり予後を申すならば、あなたの生命は今日限りである。今日なすべきことに今日一日の精魂を打ちこみなさい。明日あることを期してはならない。明日の計画にのみ生きて、今日を無駄に過すものは、明日亡者であり、明日ノイローゼである。

人生の生死は七十年の問題でなくて、今日一日の問題なのである。今日一日を生き抜く人のみが生死を越える人であり浄土が約束される人である。四十余年、医者として沢山の人の臨終に出会つた。鮮かに生死を起えてゆく人のあまりに少ない。しかし、これは人ごとではない。自分の足どりのおぼつかなきを思う。

本願の船には乗れど煩惱の

船のともつなはなしかねつも

昭和卅五年二月、稿。

# 近角大先生を偲ぶ

三 瓶 徳 英

近角常観先生御往生から廿三回目の御祥月が来ました。毎月三日朝、読経焼香して、御写真に礼拝すれば、先生の微笑愛語……オム／＼可哀相にナ、と仰せらるる様な気がして、暫時、思い出に耽り、或時は涙にくれて、先生の御声を聞き、或時は思い出し笑いに、一人微笑む時もあります。

私は昭和九年六月から同十六年十一月まで、ほとんど欠かさぬ様に心掛けて日曜の御講演を拝聴し、常音先生と、大先生に聞かせて頂いたことが誠に嬉しく、有難いことであつたと、老老の今も、毎月拜聴している気持が時々おこるのであります。大平洋戦争がおこり、御長男文常様が戦死なされた日の未明、大奥様が夢をみられ、「女常大尉が部下をつれて帰られた」と大先生に申された時、「文常は死んだぞ」と仰せられた所、はたして戦死なされたと聞いたことがあります。

その頃、大先生は度々、歎異鈔九条のお話、それから、明日の夜はいけますものど知りながら  
入るさの月のおしくもあるかな

た。

昭和十一年かと思いますが、十一月第三日曜に、求道会館の報恩講の日、参りましたところ、読経の直前、小使さんが私を呼び、大先生のお呼びだ、と、お控室へ導かれて参りました時、出勤僧五名、外に徳国一先生始め十名ばかり大学教授など居られたが、先生は私に向つて、

「オー三瓶君、今日は上壇へ出勤せよ」

との仰せで、私は法衣も何もありません、と申しますと、奥様に何か仰せられ、やがて白衣と黒衣と墨袈裟を指され、これを急ぎ着よとの仰せに従い、上壇へ出勤、助音させて頂きました。

その後三年目位の時、奥様から、先生の御命令で、これをやると、一と包みのものを頂き、掃宅開封すれば鶯色の大形の縮緬の立派な御風呂敷を頂き、私よりも亡妻が大いに喜び、感激しました。この品、只今も大切に保存して居ります。先生御染筆の半切の詩、御自筆の御手紙、奥様お代筆の御手紙、縮緬の風呂敷が、第一の宝物であります。

私は一昨年から痒い病気に罹り、井田診療所の大本先生の御厄介になり、段々よくなりましたが、余り長いので昨年秋頃から四五回先生に申し上げ、私は老齢ですから癒

の歌を聞かせて下さいました。

また、歎異鈔九条は、すこぶる人の心にとまるけれど、読み違い、思い違いをする者が多い。

「親鸞聖人でさえ踊躍歡喜の心おろそかであり、急ぎ浄土へ参りたき心起らぬと仰せらるる故、我等は喜べなくともよい浄土をよるこぼすともよいと云う様に考える者があるが、それは誤りである。

聖人はそれでよいと仰せらるるのではない。よろこべぬ私、浄土へ参りたく思わぬ煩惱熾盛の私なるが故に、流転輪廻する汝が可哀相で、ドコドコまでも見捨てられぬ必ず救うとの大悲大願が有難いと、金剛堅固の信念の決定が生まれる、これが他力廻向である」と。

又、先生は非常に親しいのお方であつた。先生御入信直後「親鸞聖人の信仰」の原稿を書かれ、学者で信仰篤い御父君に、この稿のわるいところを指摘して下さいと御渡しなされ、父上が読み終られて、先生に返され、

「これでよろしい。この上すこしも訂正すること勿れ」と仰せられたから其儘一つの原稿にしたと仰せられました

り切ることは難しいと思ひます、大変楽になりましたからすこし休ませて頂いたら如何でしょうと申しますと、今すこし治療せよとのこと、本年九月、殆んど恢復し、十月始めに治療を打切つて頂き、まことに嬉しく御親切を感激して居ります。

其後十月十三日。私の弟と、その妻二人共医師でありましたが、二人共死亡し、子供六人が年回の仏事をするから来いとのことで参りました。私は三日逗留して、甥二人は医師で学位もと、叔父三人も医師で、五人の医師と、他に廿人位のお客とで賑やかな仏事で、御師匠寺は三隅の明光寺様でありました。往年近角先生御巡化の事もあり、其際御長男、文常様御誕生の電報を益田の専光寺で受取られ、先生はまことに御満悦で、電報で御命名なされ、この時の御染筆の軸物が同寺にあります。

私は大先生の教えて下さつた御言葉も文章も国宝的と思ひ時々拝読します。

『信界建現』第五十一号（昭和十二年六月号）に、「相對解消の本源」という御高説があります。私はその御講演を求道会館で拝聴しました。その御指示が二十六年後の、現今にすべてあてはまると思ひます。今その大略を抜記して見ますと、

相對解消の本源をもとむる時、その出発点としては、近時、対立相尅の解消ということが政治上の焦点となつてゐる。これは政治上ばかりでなく一般社会の問題であり、人生の問題である。言い換えれば、現代の人心が対立相尅に苦しんでいるということである。その解消は如何にして実現すべきかを究めねばならぬ。

対立相尅は人生が相對であるから、妥協も協調も、利害の地を離れぬため、利害相反する時、又は友情の一致によりて築き上げた平和ならば、相互の意見友情が破綻する時は、忽ち鬭争と變化する。総じて人生は五分五分で、相對の現象なれども、平和なる時は、その相對性に気づかぬ。例えば、愛別離苦に遇うて、煩悶する如きも、畢竟、相對的の人生の破綻である。

思想問題に於いて最も注意すべき点は、相對的の人生に相對的思想を以て生活しながら、自分の思想及び行為だけは絶対である様に思つてゐることである。

即ち人生は、常住なるもの、快樂なるものと誤信して居る故、相對的の幻滅に遇い、其煩悶を解消すること能わずして、理想の破産、平和の破壊となる。吾人は理想上平和を實現せんとして、正義のために献身的に働き、敵を愛して悦服せしめ、無抵抗を以て飽くまで他の抵抗を解消せしめんと努力せし時、幸に他が自己を理解し、善意を以て我を

平和の實現となる。

聖德太子はこの相對解消の本源を、篤敬三宝と云われ、親鸞聖人は、太子の信念を如何なる民衆にも徹底する様に自己の経験をもつて示して下さつた。その根本真髓は他力廻向という德音である。

普通に廻向といへば自己の善をめぐらして、他に差し向けることとせらるるのに、親鸞聖人は、我等の自力をもつては毫髪も廻向する能わぬことを極説され、如來より廻向せらるる南無阿彌陀仏によりて相對解消、平和建現を完成することを示し給ひ、國際間の平和から、社会、家庭、個人等の平和の根源に達し得るのである。

故に無限大悲の本願の大威力の下に思ふ存分相對的に活躍し、資生産業是実相の大乗的見地に立ちて、国家的社会的に粉骨摧身、報恩の生活を建現せねばならぬ云々。

と仰せられました大先生を偲び、拙文を綴つて見ましたのが反つて先生の御真意にそむいてゐるのではあるまいかと恐懼に堪えませぬ。

南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏

愚人徳英。

昭和卅七年十一月六日、於三川温泉場稿了。

迎えるなれば、姑息なる平和を貪りて満足するも、これは絶対的の平和ではなく妥協的、相對的の平和なる故、異卵の危機を含んでゐる。

聖德太子の憲法に

「人皆心あり、心各執る所あり。彼是なる時は我非なり。我是なる時は彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ云々」と教えられた。

この人生觀に依りてこそ對立相尅の極点を達観し、理想も平和も全く破壊せらるる境地となる根本も知らされる。

人生は善をなすも相對五分々々にして絶対の善なし。我は善をなせりという偽善者なる事を覺知し、一分一厘も眞実の善をなし得ぬ、我利我執の塊たる事に気づき、相尅鬭争の根源は我にありという罪惡觀に達する。

ここに於いて、始めて信仰問題にはいり、如何なる抵抗に對しても飽くまで無抵抗なる態度を取つて融和せんとする我理想は、全く破壊し、我抵抗性も融和せしめらるる絶対無碍の本源は、絶対無碍の態度を以て我等に臨んで下さる卍十方無碍光如來がましすことが知らされ、大慈大悲が絶対的に我等に向つて下さるために、如何なる抵抗的、相對性的の我等も、遂に融和解消せしめられ、慚愧懺悔の念を起し、歡喜感謝の心が溢るる、これが人生相對の解脱、

一茶を憶う

聚墨生

月花や四十九年の無駄あるき

と述懐した一茶は、五十歳頃、義弟仙六との間のもつれを和解して、華やかな江戸の生活を閉じて郷里柏原に帰つた。

これがまあついのすみかか雪五尺

明月の御覽の通りの屑家かな

と述べ、やがて妻を迎え、子も生れたが、  
匍え歌え二つになるぞ今日からは

とよろこんだのも束の間  
天折また天折、

苦の婆婆や花が開けば  
開くとて春の夜は春の夜  
ながらさりながら

と歎き、五十七歳には、  
ともかくもあなたまかせ  
の年の暮

と、よしあしの力のはか  
らいから解放せられ、

あばらやのその身そのまま明けの春  
をむかえてゐる。

堂の鈴

(九)

佐藤強三郎

帰命 (一)

一年位経つた秋の成る日、父親が病氣だから帰れ、という知らせが来たので、一郎は暗い気持ちで柏崎の自宅へ急いで帰つた。両親は勿論、お藤も喜んで迎えた。が、一郎はちよつとも落付かなかつた。

父親の病氣は意外に早く治り、三ヶ月位で、もうそろそろ起きて店へも顔出しが出来る程になつた。一郎は毎日苦悶して不安な暮しを續けていたが、遂に意を決して、一週間位家を離れて、一人で考えさせて貰い度いと父母に願つて、湯沢温泉へ出かけた。

一郎は旅館で一人考えにふけつた。

へあれから毎日々々お藤にかしずかれ、その度毎に自分が負けてばかり居る様で気が引ける。それに反して、自分が宇治から帰宅したことを、お小夜はどこから聞いたのか、店へは電話をかける。ほつておけば何度でも店へ来る。番頭に留守の返事をさせておけば、わざ／＼店迄しらべに来る。ついには商売にもさわるだろう。お藤はそれを覺つても、何とも言わずに働いて居る様に見える。そして両親に

も良く仕えてくれる。こんな有様では俺はたまらぬから、お小夜とハツキリ別れ様と話をしますが、彼女はどうしても別れるとは言わぬ。内心、ホントに妻お藤に対して済まんと思う。……こんなことでは一体、自分はどうなるだろう。どうすれば良いだろう……。

お藤には一旦は、最後の覚悟までさせた俺だ。お藤は身投げまでしたのだ。男の自分さえ、こんなに苦しむのだ。ましてや、お藤は身投げした頃、どんなに苦しんだのであろう。今また現にどんなに苦しんでいるのであろうか。自分は義理と人情とに押しつぶされて、右に流され左に倒れ、立つて居る足許から崩れて来る様な気がする。男の自分でさえこんなに苦しむのだ。弱いお藤の苦しみはどんなであらう。

親達もどんなに苦しんでいるか、毎日顔を合わせていれば、すぐそれとわかる。

……こんな板ばさみに会つて俺はどうすれば良いのか……  
……二人の女から、みんな離れてしまえば解決は簡単であるが、家を出て家事をすてるわけに行かぬ。一方へ行けば

一方が追う。捨てれば怒る、恨む、呪う。然し恋を知つた自分は彼女を忘れる事が出来ない。両方に怒られないで済む方法はないものか。

こんな苦しみから免れるには、自分が消え失せるにしくはない。

……思えばお小夜はどんな事をもやりかねまい。いよ／＼腹を立てれば、お正月の売出し、店の書入れ時に、白風公然と妻文句をならべて店先で動かぬかも知れぬ。女鬼に見込まれた様なものだ。このままで行けば、何時かは新聞に醜聞をさらすことになるかも知れぬ。そんな不名誉にはたえられない。

……妻お藤が家出をした当座、あのお小夜が泣いて口説いた事は、まだ忘れられない。ぐん／＼迫つて来た。そして云うには——私のために、貴方の奥さんは家出をした。私共はべん／＼として生きて居られない。キット一度は死なねばならぬでしょう。どうせ、あんな貞淑な奥様を殺す様な悪い事をやつた私共は、ただ生きては居られぬ。必ず罰が当るでしょう。ぐず／＼して生きて罰に追いつめられて生きながら地獄の責め苦を受けて、殺されるよりは、早く先に死んだがりました。私は覚悟しました。貴方、どうせ遁れぬ罪、逃れられぬ命、いつそ二人で共に手をとつて消えましょう。生きて汚名をさらしているよりは、死んだ

がました。サアやりましょう、どうですか。——と捨鉢な台詞を投げかけられた時には、ホントに途方に暮れた。……これから家へ帰ればまたお小夜からあの口説をくり返されるだろう……。

……一方、お藤はどうだろう。いかに優しい気丈な女でも自分の夫が、これ程に苦しんで居るのを感じないわけはあるまい。どうしてあんなにしどやかにして、いられるのだろうか。居られるはずはない。……私はやさしくさればされるほど、かえつてつらい。怒られるよりよつぽとつらい。

……右か、左か、覚悟はどうじゃ……と自分の心が自分を責め立てる。ああ、女鬼が追いかけて来る。と。

××× ××× ×××

一郎は湯沢へ来て、心機一転、何とかして今後の決心をつけたいと、一人脱れて来たが、過ぎし昔のことが、後から後からと浮んで来て、寝ても眠れない。そしてまた心に思う。

八信哉さんの青年は未完成の者だから、兎角間違いを起し易いものである。然し幾度失敗してもくじけず、あきらめず、正道に帰つて進みましょう。……という言葉は忘れられない。理屈はわかるが、いずれとも決心がつかぬ。元気が出ない。



湯沢温泉で一郎は、一人、とつおいつ考えては寝、起きては考え、ついにぐつたりと疲れて、酒もやめ、飯も食わずに、風から寝床にもぐり込んでしまった。翌日も一日中ただ無為に暮し、遂には、考える元氣も、戦う氣力も失せてしまった様である。

××× ××× ×××  
一郎は理想と現実、善心と悪心、との間にはさみ打ちになつて、スクンでしまつた様でもある。………

また心に思う。八俺は、こんなに、女々しい有様になつてしまつて、お藤に恥かしい。親に申訳がない。人は笑うだろう。俺は本当に、死ぬるだろうか。お小夜は俺と心中するだろうか。一度離婚したことがある女だ、心中など口先だけであらう。しかし今はお小夜は一人身である。今だに良縁がなく、子供もなく淋しく暮している。いよ／＼絶望となれば、一人で死ぬより、二人の方が氣強いと思ふかも知れぬ。この俺は、その時、本当に心中するだろうか。女から無理心中など、聞いたこともない、思つてもゾツとする。……然し、明治の頃、島村抱月と松井須磨子は心中した。芥川竜之助は自殺した。V

××× ××× ×××  
その夜、突然宿の女中が来て、「お宅からお電話で御座います」という。ピツクリして出て見ると、柏崎のお藤か

歩いてるのであらう。まゝよ、帰るまで待とうVと腹をきめ、宿へも警察へも、何も言わずに、一人でじつと待っていた。

二日待つたがまだ帰らぬ。三日待つたがまだ帰らぬ。四日目の朝、警官が宿へ来た。信哉は取るものも取りあえずその警官と一緒に警察署へ同道した。署で聞けば

「呑み屋でヤクザと喧嘩をして、前後不覚に酒に酔いつぶれているので、連れて来て留置所へ容れている」  
とのこと。信哉は酒代等を支払い、身元を一切引受けて、身柄を引取つた。道々きけば、一郎は旅館を出てから苦悶の末、毎晩宿を変えて、転々として呑み歩いて居たのであつた。

××× ××× ×××  
信哉は、早速柏崎の店へ電話して、一郎の安全を知らせて、今後のことを打ち合せた。それから部屋へ帰つて静かに語り出した。  
信哉「お苦しみの事と申します」  
一郎「ハイ、ありがとう……」  
信哉「これから、水上温泉へ行きましょう。お案内しますから……」

一郎はだまつてついて来た。それから二人は汽車に乗つて清水トンネルを通り、水上温泉へ着いた。宿で、信哉「ま

らである。それには

「今日、信哉さんがおいでになりました。これからでも早速そちらへ行つて頂こうと思ひますが如何でしょう。是非々々、この際お会い下さいます様に、くれぐれもお願ひ致します。……」

と泣かんばかりの声である。トッサの間に、一郎は「それなら、こちらへお出で下さる様に待つています」と返事をした。然し一郎は、こんな意氣地のない様子を人に見せたくない。ことに信哉さんには尚更見られたくない。そこで女中を呼び、

「一寸、出て来る。柏崎からお客様が見えたら、この部屋で待つて貰つておくれ、私も早く帰つて来るつもりだから」

と云つて外出した。信哉は、その夜遅く宿へ着いたが、一郎は居ない、遅くまで待つたが、遂に帰らぬ。宿屋では心配して何度も／＼来て

「もうお帰りになるでしょうから、御湯にてもお入りになつてお待ち下さい」

と不安顔である。其夜十二時も過ぎた頃、番頭がまた相談に来た。信哉は「私にまかせて置いて下さい」と云つて一人で寝てしまつた。

信哉はあれこれと思案したが八一郎さんは煩悶して、出

あ、お疲れでしょう。氣分を換えて氣樂にお休みなさい」と別々に部屋を取り、一郎が寝ようが、起きようが、酒を呑もうが、呑まいが、氣ままにさせて置いた。然し万一の危険を案じて、一郎が散歩に出るときは、必ず一緒に行つた。氣が向いて天氣が好ければ、湯檜曾温泉あたりへも足を延ばして、共に紅葉を探つたりした。影の形に添うように決して離れない。一郎は一日中、自分の部屋で、酒を呑んだり、本を読んだり、宿にはかり引込んで居ることもあつた。

××× ××× ×××  
ある晩、一郎は信哉の部屋へ来て、夕飯を共にし、一杯呑んで軽く切り上げて、語り出した。

一郎「これからどうすれば良いでしょう」  
信哉「人を相手にせず、無碍の眞実にひかれて生きましよう、貴方は今、善いも悪いも知つてい、なお決心が着かぬのでしよう。私もそうでした。両頭の蛇のように、右へも行けず、左へも行けず、止まつているわけにも行かず、無理に動けば身が裂ける。

……それは結局、悪をおそれているのです。悪い自分。決断のつかぬ自分。こんな自分は、どうして生きて行かれよう。一層自殺した方が増したとも思う。然し自殺したいのは悪をおそれるからです。死にたいのに世の

非難から脱れたいのです。悪をおそれるのは、善を誇るからです。

人の思惑おもむくをはなれて、自分の一心を決定する外、眞の解決は無いと思います。……」

信哉「貴方は今どんな御考えですか」

一郎「お小夜と絶交して本当にお藤の許へ帰りたい」

信哉「そう出来ませんか」

一郎「お小夜と上手に別れたいのですが、相手は世間をばからず、無茶をやりそうです」

信哉「上手に別れようとの考え、……それが、迷いのも

とでしよう。悪い者は、表に現われても現われなくとも悪いのです。世間から悪く思われても仕方がないので、悪い者は如何なる非難をも甘んじて受け、その責任を果し、正しいと思うことをやらねばなりません。

お小夜さんからも、お藤さんからも、悪く思われたくない。醜いところを世間に知られたくない。そしてコッソリとうまく解決して行きたいというのでしようが、そんなうまい解決はないでしょう。

四方八方、気を配つて、どちらにも良く思われようとするから、決心がつかぬのです。すくんで仕舞うのです。

……然し、勿論、悪いことを、ことさら世間に発表する必要は、毛頭ありません。が、眞実は一路です。……

……私共は、現在、自分は何をなすべきか、何が善で何が悪かと迷う場合が多いのです。それなのに、今貴方は……自分はお小夜と絶交して、妻のお藤の許へ帰るべきである……とハッキリした目標が立つているのです。その様に両親の居ます、お藤さんの許へ帰るのが眞実でないでしょうか。

絶交すればお小夜さんは、お店へ露骨な誘惑に出るでしょう。心中を迫るかも知れぬ。自殺するかも知れぬ。そうなれば、新聞も大きく出すでしょう。……!!

然したとい、何事が、内に外に起きようとも、貴方は妻の許へ帰るべきではないでしょうか。どうかよく考えて下さい」

(続く)

迷いゆく暗路の末のはてをなみ

はてなくてらす光なるらむ

行誠上人詠

## 仏典と私との親しみ [一]

福島政雄

### 法華經の比喩

今晚は、私が仏典にどんなに親しませて頂いたか、そういうことをお話し申上げて見ようと思います。

その仏典といううちでも、お経であります。どのお経を私が最初に読みましたかと申しますと、法華經であります。それも私は二十歳前後の時に、前にも申しましたでしょうが、日蓮聖人に相当熱心になつて、丁度大学の学生時代でありましたが『日蓮聖人御遺文』という厚い本を求めてまいりました。その中であちらこちら読んで、兎に角、日蓮聖人という方の人間にふれ、相当感激をもつて、拳句が日蓮聖人は法華經を第一のものとしていられるから、法華經を読もうという気持ちになりました。丁度私が大学を卒業しようといいたします春であります。明治四十五年であります。その春に、日蓮宗のお方で、山川智応という方が、初めて『和訳法華經』という本をお出しになりました。それによりまして、兎に角、解らんなりに法華經を通読させて頂いたのであります。

その頃の私は、まあ法華經は解らなかつたと申しますの

が正直なお話で、唯、法華經の中に、いくつもお譬の話が出てあります。その中でも、火宅三車の喩とか、長者窮子の喩とか、それから薬草喩品に出ております薬草の喩とか、それから衣裏の中に貧乏な人のために玉を縫いこんでやつたという喩、そういう喩を、その本当の意味は解りませんが、非常に面白い喩という、それ位解つた積りで読んでおりましたのが私の二十四歳の春であります。

然しその頃、法華經を丁度三度位、繰り返して読みましたかと思ひます。その時の感じでは、キリスト教の聖書というものは、読んでピンと心にひびく。この法華經を読んだら、ホノボノとした世界に入っているようで、スグ自分にピンとひびくというようなものではない。これは成程仏教のお経というものは違ふ。仏教のお経というものは静かにこれを繰返し／＼読んでいるうちに段々このころにしみこんでく。そういうものであるう、という感じをおこして参りましたものであります。

ずうつと後になりまして、金子大栄先生が、仏教のお経というものは、低い声ですうつと読んで行つて、くり返し

／＼読んでいくと、そのうちに段々心にひびいて来るということを仰言つたのを聞いたことがあります。成程そういうものであるかと云う感じを、ことにこの法華經について持ちましたのであります。

### 法隆寺で聴講

ところが、この法華經というものを、私が多少でも解り始めましたというのが、四十台になりました。法隆寺に一夏もつて、佐伯定胤げいか下から聖徳太子の御註による法華經の御講義というものを聞きましてから、この法華經というものがすこし解り始めたと思つてもよいかと思つて、その時私は非常に感激してお話を聞いたものであるとして、こういうお話というものは滅多に聞かれるものでない、三千年に一度花が咲くというウドンゲの華が咲く、それと同じように、その時機ときに遭あうといふことは滅多に出来るものではないというような感じをおこしました。

その時、七十歳位、今の私よりすこしお若いお年でありました。その佐伯胤下のお顔を拝見しながら、非常な感激をもつて、涙を流すばかりの心地になつて、八日間の法華經のお話を聞きましたのであります。その時から方便ほうべん品というものがすこし解り始めたといふことになりました。

そしてこの法華經の教というものは非常に広く大きく一

やるといふことが出来ないではないけれども、子供等に呼びかけて、子供等自身に出て来るようにさせたいと、こう考えまして、子供等に呼びかける。

「あぶない、家が火事になつて居る。その家の中に居るとひどいことになる、早く外へ出て来い」

と呼びかけますけれども、子供等にはそのことがひびかないのであります。

「お父さん、火事といふのは何ですか。あぶないといふのは何ですか」

と云う様な調子でありまして、相変らず火事が大分燃えかかつて居る中で、あつちへ行つたり、こつちへ行つたりして遊び戯れて居ります。

そこで父親の長者は、それではいかぬと思ひまして、また改めて子供等に呼びかけて

「お前等にいゝおもちゃをあげる。羊の車、鹿の車、牛の車がある。そういうものがあるから皆外に出て来ないか」

と呼びかけますと、子供等はそういう玩具おもちゃの話をしきと、すぐ解りまして、みんなが、出口から出て参ります。そして

「お父さん、羊の車、鹿の車、牛の車と云われました。それは何処にありますか、下さい」

切を包み容れる教である。決して狭くるしい教ではない。「非常に仏教というものが包容的なものだ」ということは佐伯胤下から、しばしば承つたこととありますが、それは法華經にある。法華經というものは一切を包み容れて何ものをも排斥しないといふ広い／＼仏のお心を述べてあるお經であるといふことを、いよ／＼感じますようになりましたのであります。

で、その譬の意味も段々と解るようになりました。この長者窮児のことは前に申し上げましたが、この火宅三車の喻も有名なお譬話であります。

### 火宅三車の喻

非常に古くなつて、もう腐りかけて居るような家がある。それは長者の家であつて、長者の子供が三十人あります。か、その中に居る。長者が外出して居りました間に、その家が火事になります。然しその子供等は火事というやうなことにまるで気もつかないで、その中に遊びたわむれて居ります。そこがただ燃え始めたというばかりでなく、その中には、怖しい猛獸や、いやな毒蛇、いやな虫の類たぐいが一杯ウジヤ／＼と居る。それが丁度火事になつて居る。

長者は外から飯つて見ると火事、そして子供等は何も知らないで中で遊び戯れて居る。何とかして助け出さねばならぬ、自分には力もある、何か子供を乗せて外へ出して

と云いますと、お父様は

「これをあげる」

といつて、非常に大きな白い牛が引いて居る、何とも云えない立派に飾つた車、それを一人々々に一つずつ与えた。それで子供等は、初めにお父さんから云われたものよりよつほどはるかにまさる立派な車を貰つたので非常によろこぶといふやうなところで火宅三車の喻といふのが終つて居るのであります。

### 方便と眞実

これを段々噛みしめて参りますと、味が深いといふことがわかつてまいります。といふのは、この方便と眞実といふことが問題になつてまいります。父親がこういう三つの車があると云つて呼び出す、それは方便であつて、眞実は、はるか立派な車を一人々々に与えるといふのが眞実である。そうすると、その三つの車といつたのは方便であり、最後に非常な立派な車を与えたといふのが眞実である。すると方便といふのは嘘うそであるか、そういうことが問題になります。段々考えさせられまして、いやそんなことではない。方便といふのは方便の中に眞実がこもり、眞実の中に方便がある。こういうことが此処に含まれてある。父親が三つの車と云います時、その三つの車、嘘の言葉の中には、大きな、非常に立派な車といふものがチャン

とある。それじやから三つの車という中に、大きな非常に立派な白牛の車というものがこもつて居る。こう考えていいのであります。ところがいよく与えられた大きな白牛のひいた車というものに、前云つた三つの車というものはこもつて居る。方便のうちに真実はこもり、それからまた真実のうちに方便がこもつて居る、というようなことで、方便の方は嘘である、真実の方だけが真実である。そういうわけのものではないというように、段々味うようになつてまいりました。それからこの方便というものは非常に尊いものであるというように、領けるようになつてまいりました。

### 出 出 世 間

それからこのお譬のうちでもう一つ。これは佐々木月樵先生からお話を聞いたように記憶しますが、その牛のひいた大きな車を銘々一つずつ貰つて、そして子供等は何処へ行くのか。こういう問題がそこにある。それで仏教で、世間、出世間、出出世間ということ云う。世間というのは今の譬の、火が燃えているばかりでなく一杯いやな動物、虫の類が居るといふのは、吾々の煩惱が非常に熾んになつて居る、それに喩えてある。出世間というのはそういう煩惱を超越しなければいけない、煩惱を抜け出る、そういうことにならなければいけないというのが出世間というの

く行くものではないということ段々と、そのうち長い間感じて参りましたのであります。

けれども、その根本の法華經の精神というものは常にこの私に、ある心のひびきといふものを与えて下さつて居るということだけは云えますのであります。私自身が出世間の心をもつて世間に立ち入つて縦横自在の働きが出来て来たとは云えませんが、そこを自指している仏教の世界といふものは廣大無辺であるといふようなことを感じますのであります。

### 往 還 二 廻 向

それは親鸞聖人であれば往相・還相というようなことになつて居りまして、往相は私共がこの仏の世界に往かせて頂く姿、還相は私共が仏の世界から帰つて一切衆生に向う姿、一切衆生の煩惱の世界に飛びこむ姿であると、そういうことを承りますわけでありまして、けれども私自身の心持としては、正信偈に「往還廻向由他力」と云つてありますように、往相も、還相も、ことごとく他力である。つまり往相のお姿が私に向つての還相のお力であると、こういう風に受けとられてあるのであります。自分がお浄土に往つて、それから帰つて来て、皆の衆生を濟度するといふような今の問題になつて居るのじやありません。その信心のひらけたお方が、お念仏のうちに阿弥陀仏のお浄土に往か

であります。出出世間というのはどういうことかといふのに、出世間をもう一つ出る、煩惱の世界から、いわば煩惱を超越したと申しましょうか、煩惱を踏み越えた世界に出て来た。そこでとどまつてはいけません。出世間をもう一つ出るとはどういうことかといふことを佐々木先生は問題として与えられまして、その出出世間といふのは、出世間の心をもつて煩惱の世間に帰つて行くことである。こういうことを云われまして、成程と感じましたことでもあります。つまり今のお諭で云えば、大きな白い牛のひいた立派な車に乗つて、今度はまた燃えさかっているひどい家の中に入つて行くと、そうすると、白牛でも、車でも、火にも焼けず、汚れにも染まないと、出世間の心をもつて世間に帰る。つまり自分はこの穢い世の中から踏み出してしまつた、外に出てしまつた、それで自分のさとりがひらけたといふようなことです。今度はその心をもつてその苦しみ悩みのみち／＼と今度の世間に這入つて行くのである。これが法華經であり法華經のみならず大乘仏教といふものの教はそうであるといふようなことを知らされまして、成程と感じたわけでありまして、然し、お譬をそのように説明をききますといふと、一寸解つたようでありますけれども、自分の生活の實際問題となりますといふと、お譬がそのままつきりうま

れつゝある、そのお姿が私共にかえつて、或大事なひびきを与えられるところ、大切なお姿であります。

鹿兒島県のお方で、もうお亡くなりになりましたが藤等影さんが、まだ御存生中に

「うしろ姿の説法といふものを自分は聞くのである」つまり、仏の世界に向つて掌を合している、その人の姿といふものが、自分に仏のまことをひびかせて下さる姿である、そういうことを云つて居られました。成程さうなのであります。後姿の御教化と云いますか、私の母は別に仏教の信心があつたといふわけじやありませんけれども、毎朝、神棚の前、仏壇の前に、大分久しく坐つて、掌を合せて拜んで居りました。この母の姿といふものが私にはしみこんで居るのであります。矢張り母の後姿の教化といふものが私にひびいて居る。そしてそれは結局のところ、仏の力が私の母をおして後姿という形となつて、仏のまことといふものがひびいて来る、こういうことであるといふ風に感じます次第であります。

まあそういうことが、法華經の上では、大きな白い牛の立派な車に乗つて、煩惱の世の中に這入つて縦横無尽の活動をする。その活動といふものが、私なら私の活動ではなくして、そこに仏の廣大無辺なお働きといふものがある、こうなつてまいりますと、色々なところに仏様のお姿を感

ずるということになります。法華經の第二十五品の普門品ふもんぼんであります。御承知の觀音經であります。これを拝読いたしますと、觀世音の三十三身ということをお説かれてあります。三十三の種々な姿になつて觀音様は私共に仏の慈悲を伝えて下さると云うようなことになつておりますがその觀音様のお姿をこの世のあらゆるでもこちらでも感ずるというようになりなすのであります。何時でも、誰に接しても觀音様とは云われませんけれども、たとえは私自分の子供のことであります。娘が二十六歳で亡くなりましたのでありますが、その時、娘の最後の言葉は、

「仏様が見える」

というのであります。どうもこの娘の言葉を味つて居りますと、いと、おろげん応現を感じます、娘も色々とい曜学校のことを手伝つたりいたしましたものでありますからいよ／＼死ぬる時になつて仏様というものがひびいてきて、仏様が見えると言つて死んだ、その娘というものは普門品の觀世音の三十三身応現と云われて居りますところの觀音の化身といつてもいいような姿であるということを感じますのであります。

そういうことは、何かの機会に色々な方からうけるところの自分の感じのうち、この方の、今の一言、今のお姿というものが、それが觀音様の化身として自分にひびくので

### みほとけをたたえて

水谷美津子

心にすぎ間が出来た時、知らない間にお念仏が私の中に入っているのです。

空気がすぎ間をつくらぬように、

苦しみが出来ないように、

阿彌陀様がそうして下さるのでしょうか？

自転車に乗つて走つて居る時、

無心に荷物を片付けている時、

気が付いて見ると、お念仏を称えて居るのです。

どうしようもなく苦しかった時、

抱き取つてあげようとの御教が

突然私のところにやつて来た時のように、

気が付かないのに守られているのが嬉しくて

涙がこぼれて来るようです。

悲しそうな顔をして居る人を見ると

云つてあげたくなつてしまいます。

よるこびなさいよ！にこにこなさいよ！

後に阿彌陀様が立つていらつしやるではありませんか、

目をあげて御覽なさい！手をさしのべていて下さるのに、

つかまえて貰いなさいよ！こちらからも手を出して、

幼い子供が抱つこくと母さんに甘つたれるように、

ある。その人がいつも觀音様の御化身だということもなく、であります。或場合非常に有難いことがそこに起りました時に、そこにこの人の、その時の姿を觀世音の御化身としてのお姿と拝する、こういうことを私は感じますのであります。

そうでありますからして、この世の中において觀音様が種々な姿になつて、私に仏のお慈悲をとどけて下さるといふようなことを云えるわけであります。然し法華經の普門品、觀音經というものは、これを表面から淺薄にうけとりますといふと、非常な迷信になるところであります。それが迷信でなくといふ問題になりますといふと、今の三十三身応現といふことを、或人の、或時の、姿なり、心なりが私なら私にひびいてそこに仏のお慈悲といふものを感じずる、そこに觀音の御化身といふことを、その人のそのお姿なりお心なりにおいて感ずる。こうなれば決して迷信ではありませんわけであります。

未完

私達も阿彌陀様に抱つこして貰つて行きましようよ！  
温くて、氣持がよくて、目をつむつて居る丈で行つてしまえますのよ。

何も無かつたのですよ。

残つていたのは悪と苦しみだけ！

ハダカでどうすることも出来なかつたのに、

抱きあげて下さつたのですよ。

温いと教えて下さつた方はどなた？

親鸞様、法然様……………

きつと温いと指切して約束して下さつたのはお釈迦様。

苦しくても、悲しくても、一人ぼつちでも

何もなくても、悪くつても、きたなくても、

「いいよ／＼可哀相な私の子供よ」と

優しく温く抱きしめて下さる阿彌陀様。

温くなればニコニコしたくなるではありませんか？

皆に愛をあげたくありませんか？

「母様お手々」と子供が云う様に

いつも阿彌陀様に手をにぎつて貰いましようよ

信じて、お念仏申して。



# あとがき

年の瀬が参りました。お忙しいことと存じます。さて歳末、歳始ともなれば、有縁の方々の音信を縁として、思食（しじき）という言葉を懐しく思い出します。それは我々が生きて行くのに沢山な食物が要りますが、互に念じつつ念じられつゝ、生活する、そのおもいを心の食べものとして生かして貰うことであります。自分は誰からも念じられていない、即ち、思食のない生活は荒寥たるものであります。然し煩惱に汚染せられづめの我々の思念は、相手を害し毒する食物にこそなれ、未通るものではありません。ここが知らされず時、思食の最たるものこそ、念仏のみぞまこと、とよく仰がれることであります。

十二月三日は近角先生御往生の日とて、先生の御遺墨を掲げて、お念仏のお催促を頂いて居ります。

本月号は、幸に先生に御縁の深い方々の御原稿を恵まれ自然に先生の德音が再現されましたことを有難く思います。

ことに長崎市で医を業とされながら、法灯を点じ、一隅を照らして下さっている七十一歳の高原憲様の原稿を頂きました。高

原稿は一高時代から近角先生の御提撕をおうけになり、九大医学生時代には、友達から笑われるほど熱心に仏青の世話をせられ、度々近角先生をお迎えになりました由であります。

三瓶老師は、会館に常に通われつつ、先生に親炎せられた方で、耳底に絶えず先生の御法話を聴聞していられますこととて、牛ける先生に接する徳香を原稿から頂きます。

福島先生の「善財童子の求道」は未完であります。今回は御講話の都合で「仏典と私との親しみ」を頂きました。近角先生との御間柄は申上げるまでもありません。近角先生を父、白杵先生を母の如く常に随喜していられます。

佐藤様の「堂の鈴」はこれからもずっと続きます。佐藤様は、慶応の学生さんであった頃「どもり」に苦勞せられた學句、ふとした御縁で、新築された会館に先生を訪ねられ、それから一筋に白道の旅を辿つて居られます。

灯火の用意かしこし年の暮  
故郷や躰の緒に泣く年の暮

芭蕉翁

## 御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会例会。

毎月廿四日、午前午後。昭和区小椋町教西寺、法話会。

十二月廿五、六日午後。桑名市伝馬町報恩寺、報恩講。

一月十五日、午前午後。中区南小川町久遠寺、法話会。

定価 一部 二十五円（送共）

半年 百五十円（送共）

一年 三百円（送共）

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市南区駄上町二ノ八八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番